



國民典型より觀たる英國産業史

上田, 辰之助

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 37(4):499-540

(Issue Date)

1924-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053687>



論 說

國民典型より觀たる英國產業史

上 田 辰 之 助

一

社會問題、就中産業に關する實際問題の討議に當り、私共は屢々「國情の相違」といふ語を聞く。曰く「普選は我邦の國情に照して尙早なり」曰く「勞働八時間制は我産業界にとりて未し」曰く「産業の自治は現下の日本には全然空論なり」曰く「社會主義は日本國民性と相容れず」等は何れも「國情の相違」に基くか或は之を楯に取りたる議論である。是等の議論に何程の根據があるか又その主唱者に幾何の誠意があ

るかは各の場合に就て精査した上でなければ直ちに斷じ難いが、少くとも、經濟發展の經路には世界を通じての普遍性と相並んで各國又は各社會特殊性に基く所謂「國情の相違」といふ事實が重要因子として嚴存することは疑ふ餘地がない。或る社會方策が國風に合ふ合はぬの問題は往々之に含まれて居る社會上の既得權擁護以上の動かすべからざる社會事實であつて、私共の能く閑却し得ざる所である。けれども、事實に於て、經濟學は動もすれば、此種の地方的事情に深き注意を拂はぬ傾向がある。従つて、直譯の罪は經濟學に於て人々の陷り易き誤である。英國正統派經濟學に對する一部の反抗は疑もなく此點に存する。又社會運動の國際化が理論通りすらく運ばぬのも明にその由來する所は此處にある。

此の意味に於ける經濟學の缺陷を補ひ、所謂「經濟法則」の相對性を如實に説明するものは經濟史であり、産業史であると思ふ。是等の學科は經濟法則の但書たる「他の條件が等しとせば」といふ條項の眞偽の闡明に特別の興味を有つて居る。所謂「デイスタービング・エリメント」が如何に邪魔するかを研究するのである。然しながら、經濟史に於ても、産業史に於ても「國情の相違」をその必至の歸趨たる「國民性」の問題にまで押し進めて之を明確に且空高く標榜しては居ない。經濟學の故郷

は云ふ迄もなく英國である。従つて、經濟學には英國文化の馨が潤澤に保たれて居る。けれども、大多數の經濟學者は、馨の如き非科學的分子にはさしたる興味を繋かず、寧ろ之を専門外の閑事と見て居る。これは一應尤な次第であるが、私自身としては幾分の物足らなさを感ぜざるを得ない。殊に、英國の國柄として例令經濟學者であつても、それは單なる經濟専門家ではなく、彼等は大概英文化の廣い場面に相當の立場を有して居るといふことに想到するとき、殊更にこの感を深くする。私の常々特に興味を感じて居る事實はリカルドーを除いた英國經濟學者の殆んど總べてが經濟學と並んで哲學又は文藝に於ても優に一家をなして居つたと同時に一般に文藝に携はつて居つた人々の中からも卓越した經濟思想家が出て居るといふことである。經濟學が英國文化の產物であるといふ歴史的事實を全然無視し得ない以上、英國思想又は英國思想家の専門的分野に捉はれない比較的自由な此の立場は充分考慮に入れねばなるまい。此の意味に於て私は經濟學と英國文化とが私共の研究上に於てより多く接近することを切望するものである。斯くてこそ、眞に興行ある經濟學の理解と鑑賞とに到達し、充分その含蓄を味ひ得るのであらう。少くとも其の目的に向つて有力なる手段たることは疑を容

れぬ。

英國經濟史、特に産業史に如上の意味合ひにて新なる觀察點を與へたものはマックスヴェーバーに其の思想的源泉を見出す「思想典型」主義を奉ずる一派の學者である。就中、ヘルマン・レヴィ教授の貢獻最も著る。教授の近著「英國國民に關する社會學的研究」及び「英國經濟論」はよく此の立場を代表するものである。以下「國民典型」より觀たる英國産業史」と題して論せんとする所は經濟及び産業史に於ける右新思潮を基調とする英國文化論の一節である。先づ敍説の順序として經濟學に於て國民性が如何に取扱はれて來たかに就て一言し度い。

一

從來經濟學は經濟現象の普遍性に重きを置き、國民經濟の特殊性、即ち經濟生活に現はれたる國民性の問題に深く思を致さなかつた。殊に十八世紀に興つた社會に關する諸科の學問は人間性の共通にその基調を求め、之が前提の下に諸社會制度の闡明を試みた。此の傾向は現今に於ても依然として一部の學者の間に價值ある傳統として保守されて居るのであるが、經濟學に於てもその理論的方面に

之を見ることを得る。たゞ此の間に在つて、クニースが經濟學者として既に前世紀の半に於て國民性考察の重要を高調したのは特別の注意に値する。又十九世紀經濟思想の十字街頭にたつたジョン・ステewart・ミルが「國民性を律する法則は社會學法則中最も重要なものに屬す」との結論に到達したのは仇に聽くべき言ではない。けれども、經濟學として本當に國民性に注視し出したのは何といつてもシユモラーを中心とする新歴史派經濟學の勃興以來のことである。英國古典派の絶對的態度に疑を抱き經濟法則に就ては全然白紙主義を標榜して起つた同派は一面に於て一國民經濟生活内に於ける凡百の資料を古今に互り驚くべき根氣と行届いた用意とを以て蒐集し始めたが、之と同時に他面に於て、一國民經濟の發展を他の國民經濟の夫と比較考察することを忘れなかつた。而して、此の比較經濟史研究に於ても歴史派は古典派の一元主義に反抗して採つたその多元主義の立場に基いて國民性の經濟發展に及ばず影響に重要な地位を與へて居る。シユモラー曰く「今日吾人は民族を解して數代又は數世紀に互り明かにその特質を表現する所の血族的及び精神的に結合された生理的並に心理的單位となし、この前提の下に各人種又は民族の特殊性とその原因とを發見し、以て彼等の本質を理解

せんと欲するものである」と。(1) 又産業及び農業問題の考察や經濟制度の研究に當り如何に國民性の知識が肝要なるかを具に論證したる後、教授は「總べて是等の學術的問題を取扱ふに際し、少くとも民族學の一般に通ずる者は然らざるものに比してより大なる資格を具へて居る」と結んで居る。(2)

マーシャル博士も亦その著「産業と貿易」に於て國民性と産業霸權との關係を詳論して居る。(3) たゞマーシャルはシユモラーの如く國民性の問題を經濟學方法論として眞向から根本的に又系統的に論じては居ない。然し、一國の經濟的發展が著しくその國民の特質に左右せらるゝの事實は充分認めて居る。即ちマーシャルに據れば經濟學は主として經濟狀態とその趨勢とを取扱ふものであるが是等は漸を追ふて少しづゝ極めて遅々として變化する。——自然は一足飛びを好まなす——されば、經濟現象は何物にも優して “The One in the Many, the Many in the One” の關係を明かにするものである。而して茲に所謂「一」とは行動、思想、感情及び理想に於ける一國民共通の習癖、換言すれば國民性を意味し「多數」とは經濟狀態及び之が發展の趨勢に於ける多様を指すのである。マーシャルは上述の關係を説明して曰く「一定の場所及び時に行はるゝ諸經濟現象は全國民或は少くともその

大部分の習性を反映するものである。是等諸現象は何れもその場所及び時に存する人間的要素に深い根柢を有つて居る。即ち「一」が「多數」の内に見得るのである。又之と反對に、總べて社會趨勢なるものは或程度までその時、その場所に顯著な殆んどあらゆる勢力を内に藏する。されば、此の趨勢を徹底的に研究するならば、勢ひ繪畫の全幅を得ることゝなる。即ち「多數」が「一」に現はるゝのであると。(4) 換言すればマーシャルは、エマーソンがその補償論に論じたやうに國民性を以て諸經濟學現象の公分母となし、各經濟現象を以てその玉の雫に森羅萬象を宿す露の一滴となすのである。又曰く、現在は決して過去を繰返すものではない。如何に進歩の度合鈍き國民と雖も徐々にその習性と産業技術とを變更して行く。然しながら假令記憶からは失はれても過去は幾星霜もその命脈を保つものであるから、最も進歩的な國民に在つても彼等が昔有つて居た産業上の習性は實質に於て大部分持續されるのである。尤も是等習性は新しい状態の下にも早や昔の名稱を以て呼ばれなくなる程その形を變へて居ることは事實である。(5) 之れ産業及び貿易の發展に關するマーシャルの根本概念であつて、近世歐米諸國民の間に於ける産業霸權の推移を論ずるに當り國民性を極めて重視して居る。

元來經濟生活の根柢に横はる人間本能の多元主義を信條として興つた經濟史の研究はその出發點に於て既に文明史的傾向を示して居る。之れ既に一八四三年ロツシヤーがその小著「歴史的研究方法」による國家經濟學講義の序文に於て言した所であつて、其後の歴史派經濟學者共通の行き方である。右序文の一節にロツシヤーは「この研究は國民生活に關する他の學科、殊に法制史、政治史並に文明史と密接なる連絡を取つて始めて完成し得るのである」と述べて居る。(6) マツクスヴェーバー教授は又文明史學者の立場から經濟史の研究を論じて、經濟生活に於ける合理主義と非合理主義傳統主義との並立からして非經濟的分子の攻究が經濟の説明に缺くべからざる所以を力説して居る。教授に従へば經濟史の重大なる職分の一つは經濟生活に於ける合理主義と非合理主義との關係を釋明することにある。現今吾人の有する經濟制度は簿記法の普及により著しく合理化されて來た。或る意味に於て、經濟史の全部を舉げて之を計算制度の上に築かれた經濟的合理主義勝利の記錄と見做して差支ない位である。然しながら經濟的合理主義の發達は時代によつて自ら程度を異にする。先づ最初に傳統主義がある。その特徴は舊習に對する固執及びその實益如何に不拘之を次代に傳へやうとす

る傾向に存する。傳統主義は容易に消滅しない。何時の世にもその尻尾が出て居る。之を吾人の經濟生活に就て見れば、今日の經濟組織は前述のやうに確に營利經濟としては略徹底し營利の觀念を以て終始して居り且、計算といふ見地より觀てかなり、合理的であるには相違ないが事實に於てはこの形式的合理主義の内にも非合理主義の強い實質的分子が這入り込んで來ることは避け難い。此處に於てか經濟史は非經濟的分子を考量に入れる必要がある。(7) 而して所謂非經濟的分子とは宗教、政治、階級思想等に現はるゝ團體的特性隨つて國民性に關するものであると云ひ得る。

右の他經濟學者として國民性の問題に特別の注意を拂はつた人に米國のパテ
ン教授がある。教授は國民性と一定の時代に於ける環境(主として經濟的狀態)との間に行はるゝ相互作用を論じ、如何に前者が後者を壓制し之に對して優勢な地位を占めて居るかを説いて次の如く曰ふ(8)。國民性はその國民が發展の過程に於て受ける感覺的(センソリー)心象の認識より生ずる行動的(モーター)反作用の(リアクシオン)結果形成されるものであつて、一朝一夕にして成るものではない。けれども國民性の輪廓が一度出來て仕舞へば、容易に之を變へることは出來ない。而して、その發展の方向が定まれば

様々な環境の連續を通つて進路を開拓して行く。一定時の單一なる環境は國民性を支配する力がない。換言すれば國民性は現在の環境に對して單に消極的に適應するばかりでなく、寧ろ之を制統する。否、一つの環境は國民性の上に明瞭な痕跡を印する暇もなく、却て國民性のために影響されて變化を餘儀なくされる。即ち、國民性は自然を従へ、自然力の方向を變更する力を有つて居る。二者相調和するときは、その國民は與へられたる環境に適合したもので靜止状態にある。この調和が破れたときに始めて社會進歩があり得る。國民經濟はこの過程を経て苦痛經濟から快樂經濟へ快樂經濟から更に創造經濟へと進展する。(9) 之パターン教授の積極的社會適應の議論である。

以上は經濟學殊に經濟史に於て國民性が如何に觀察され、その研究の一項目として如何に取扱はれて居るかその一般を例示したものである。之によつて此の問題に對する一部代表的經濟學者の意嚮が何であるかを略明かにし得たこと、思ふ。次に考へ度い點は産業史研究に於ける國民性の地位である。

産業史は勿論廣義に於ける經濟史の一部門であるが、普通兩者の間には一つの境界が設けられて居る。先づ時代に就ていへば、産業史は主として産業革命以後

の經濟史であるが、一般經濟史はそれ以前の時代に關係して居る。随つて、産業史は一面産業運動史であるが、經濟史は概して經濟制度の歴史である。即ち、一は動的であり、他は靜的である。又産業史は經濟史に比してより直接に人間的分子を含蓄して居る。蓋し産業史は又或る意味に於て近世資本主義を中心として發生した諸社會現象の歴史的考察であるともいへる。事實に於て、今日人々の研究する産業史なる學問は少くとも英國に關しては勞働運動の產物に外ならない。之に直接の動機を與へたものは十九世紀の八十年代より二十世紀にかけて漸く隆盛に赴き、今や社會の一勢力と認めらるゝに至つた勞働階級の勃興、殊に大戰を期としてのその大飛躍であつた。夫故に、産業史は先づ以て現今の産業問題の本質眞相を捉へんがために之が發展の經路を系統的に且つ歴史的に研究することを主眼とする。

斯くの如く、産業史は既にその扱ふ材料に於て著しく動的、人的である以上、國民性の問題は産業史研究者の必ず早晚遭遇する所のものである。例へば先づ、近世産業史の出發點たる産業革命は一面に於て英國國民性の所産と見ることが出来る。即ちマーシャルも指摘して居るやうに⁽¹⁰⁾英國産業革命の外面的要因たる諸機械

の發明を可能ならしむるに與つて力あつたもの、内で鐵材の使用は英國人の性格を最もよく發揮したのである。總べて外觀よりも實質と頑丈とを喜ぶ彼等は鐵の諸産業に於て、眞にその北方人としての國民的傾向に叶ふ活動範圍を見出した譯である。されば鐵を獲んがために彼等是如何なる犠牲をも敢て辭しなかつた。英國中の檜の森林を燒き盡くしても猶足らず。愛蘭土の檜林までも坊主にして仕舞ひ、遂に造船材に事缺くに至つた。以て如何に産業革命前の英國民が産業國としての自國の運命を開拓するに腐心したか、解る。又鐵の使用によりて途を開かれた諸種の機械發明に就ても或はその單純に於て或は發明及び實驗の過程に於て、よく英國人の本領が表現されて居る。此の故に、産業革命は決して單に歴史の偶然なる展開ではなく、其の背後に人的分子の勝つて居ることを認めなければならぬ。即ち、何故に産業革命が英國に始つて他の國に起らなかつたかの問題を考へるとき自然條件の外に之と併せて英國人の國民性といふことに想到せざるを得ないのである。

更に又産業革命によつて惹起された諸の經濟社會現象——近世産業史の題材となる——に就ても是等が要するにヴェーバーの所謂經濟合理主義と傳統主義

この對立及び調和をその基調とするのである以上、此處にも亦人的國民的、特徴は見逃すべからざる分子である。最近産業史研究者の第二思想は産業史の「如何に」より出で、「何故に」に向けられつゝある。何故に英國は資本主義の誕生地となつたか。何故に英國の社會主義及び社會運動の發達が彼の如き徑路を採つたか。チャーターイズムは果してマルクスの謂ふ階級闘争の現れであつたか。ペンダムの功利主義は如何なる意味で英國國民性の產物であるか。フエーピアニズムやギルド社會主義は如何なる點に於て英國的であるか。英國勞働黨の特質とその思想傾向如何。是等は必ず最近英國産業史を研究する者をして考へさせる問題である。産業問題の裏には英國思想の特徴、英國人の國民性といふ困難ではあるが然し興味ある根本問題が控へて居る。而して是れ即ち斯學研究に於ける現下の趨勢の由て來る所以である。

産業史に關する國民性の考察は獨逸經濟學者の英國産業史研究に於て最も思索に深く且つ精緻なるを見る。就中ヴェーバー、シユルツエ、グーヴェルニツツ及びヘルマン・レヴィーの三教授を以て最も顯著とする。又最近の著者としては、英國社會主義史に於けるバーア氏、英國社會主義及び社會化に於けるロイブツシャ

一女史、英國自由主義の戰時經濟に於ける變遷を論せるメンテルソン女史、ホイットレー主義及びギルド社會主義の本質論のブラウト博士、英國勞働黨論のギユントラー博士等は何れも如上の立場を採る研究者である。

英國に於ける産業史研究者中には思想的、國民性的にその題材を取扱つて居る學者は稀である。スレイターでもリスでもフエイでもノウルス女史でも何れかといへば材料本位、敘述本位であつてイデオロギッシュではない。之に反して純産業史學者ではないがカンニングハム、アッシュレー、ダイシー教授等の産業論には時折思想的といふか英國文明の批判的といふかそうした閃光が見える。又其最近に至つてはトーニー氏がその著、獲得の社會及び最近米國シカゴ大學經濟科機關雜誌ジャーナル・オブ・ポリテイカル・エコノミーに發表した論文、十七世紀宗教思想に於てかなり深く此の見地から英國思想の問題を取扱つて居るやうに思はれる。

我邦に於ては英國經濟、英國文明に造詣深い上田貞次郎博士がその近著英國産業史論中數個所に英國民性のことに言及して居られる。特に英國勞働階級に見出される組合の精神は之を英國民獨自の特性として國民性の問題に結び付けて

考へて居られる。又一般に産業史の説明に非經濟的分子を考慮に入れることの必要も充分に認めて居られるやうである。

以上によつて概略經濟史及び産業史の研究に國民性が如何なる地位を與へられて居るかを窺ひ得るであらう。今や進んで、産業史に於ける國民性その者を詳論するに當り、先づ國民性の意義に就て一言する必要がある。

國民性なる語の内容に就ては社會學者間に未だ意見の一致がない。何を以て國民性となすか各學者によつて見解を異にする。或は人種的に一國民固有の基本的性格を前提とし、この精神がその國民の歴史を貫いて不斷の流をなして居ると考へ、之に國民性の名稱を附する學者もある。かゝる見方によれば、英國民性は則ちアングロサクソン精神の表現であつて、今日の英國人は性格に於て千數百年前の北歐民族と本質的な共通點を有つて居るとされる。随つてアングロサクソンの古事記ベールウルフは纏て現代の英國民性を反映するものと考へられるのである。即ち此の意味に於ける國民性は絶對的數量であつて時の變遷によつて増減はないと見做される。

例へば、アングロサクソン民族優越論の著者デウモラン氏は英國民を截然とケ

ルト族、ノルマン族及びアングロ・サクソン族とに三分し、その各に特定の民族性を振當て、英米國民の今日の優勢はアングロ・サクソンの個人主義的傾向がケルトの民族的集團傾向及びノルマンの國家的集團傾向に打克ちたる結果であると結論して居る。(11) 即ち、此の場合個人主義的傾向はアングロ・サクソンの今も昔も渝らぬ原始的、先天的特質と認められて居るのである。

之に反して、一部の社會學者は國民性を以て相對的現象となして之に及ぼす環境の影響を重しと見る。人種説に對して彼等は斯様に答へる。先づ人種の完全なる純正は求め得ない。随つて、人種によつて國民性を説明することは不可能である。又假りに生理的特徴により人種の區別標準がつくとしても、この標準は心的又は社會的典型の標準とはならない更に又同種の國民と雖も一度移住して別個の天地に生活するか或は全く別種の文明に接觸すれば、その同種の關係は破れて分裂するものである。かくの如く、人種は一つの抽象的概念であり假設であるに過ぎない。然るに、國家は一つの社會であり、具體的な而して活きた實在である。即ち協同的生活、換言すれば同一外的條件の下に生活することを意味する。夫故にその社會各員間に性格、類似——心理的共通——が生ずることゝなる。(12)

私は以下産業史に於ける英國國民性に關して若干の考察を試みるに當り國民性なる語を大體右の第二説のやうに相對的に用ひ度いと思ふ。蓋し假令人種的立場に立たないで、英吉利の島に土著して以來の英國民だけに就ていつでも果してその期間を一貫して彼等の間に確然たる性格や傾向の脈絡が通じて居るや否やは俄かに論斷し得ざるを以てである。斯かる結論を下し得るためには各時代の英國社會を横斷し之を歴史的に縦列して見たときに果して其處に同一傾向が軌跡となつて現はるゝや否やを確めなければならぬが、こは猶限りなき資料の蒐集と諸科の學問よりする之が精密なる検討とを必要とする。されば、正確にいへば今日に於ては未だ歴史的に統一ある國民性を論ずること不可能といふべきであらう。たゞ、吾人のなし得ることは吾人の智的眼界内にある限られたる時代又は數世紀に現はれたる一國民の傾向を觀察して、其處に何等かの思想典型を築き上げるに過ぎない。茲に國民性とは此の時代と場所とに條件付られた相對的の國民的傾向を指すのである。

註 (1) Grundriss, 1908, S. 140 (2) Grundriss, S. 159. (3) Industry and Trade, 1919, Chap. III-VIII.

(4) Indu Trade. P. 6. (5) Ibid. P. 6. (6) Gide & Rist: Hist. of Ec. Doct. P. 382.

(7) Max Weber: Wirtschaftsgeschichte 1923, S. 15. (8) Patten: Development of English Thought, P. 12 et seq

- (9) S. N. Patten : Reconstruction of Economic Theory, P. 92. (10) Marshall : Industry and Trade, P. 63, et. seq.
 (11) Edward Demelin : Anglo-Saxon Superiority, Duthels Introduction to English Edition
 (12) R. M. MacIver : Community pp. 272-278.

三

今國民性を右の如く觀念して近世産業史に現はれた英國民を見ると其處に國民性と呼び得る一つの思想典型がはつきりと浮き出て来る。之れ社會的には英國獨特の意味に於けるミッドル・クラスであり、思想的には所謂「自由主義」であり宗教的には非國教徒或は「清教徒」的である所の典型である。バテン教授は之を性格的に分類して「屈竟人型」(The stalwarts)と呼んで居る。⁽¹³⁾ 近世英國に於ける企業家階級及び勞働階級の過半就中熟練勞働者は此の屈竟人型に屬するのである。此の典型は今日の英國を制服して、英國社會及び英文化に一つの調子を與へた。即ちミッドル・クラスの哲學が今日の代表的英國思潮であり、清教主義が英國國民生活の萬端に對して隱然たる決定的勢力を揮つて居るのである。英國の資本家も勞働者も將た又一般公衆も悉く此の勢力から免れることが出来ない。今日吾人が通常英國國民性として直接に感得するのは要するに此の典型である。之を

離れては英國社會問題も産業問題も的確に論ずることを得ない。戰雲收まりて日未だ淺き頃英國飢饉撲滅會主催の經濟會議に特別賓客として獨逸より招かれたるシユルツエーグエーヴエルニッツ教授は其處に會せる所謂リベラルスの諸團體に就て多少英國のことを心得て居る者として次の如き觀察を下して居る「左翼を見渡すと其處には勞働の廣き世界が展開して居る。今は昔程島國根性を有つて居ないが、それでも英國國民獨特のその倫理宗教的色彩はどうしても歐大陸の住民には合點が行かない。而して奇妙千萬な現象は是等勞働運動の指導者なるものは大部分日曜日には公園の野天で素人牧師として説教と社會主義宣傳とを同時にやつて居るといふことである」。(14) 卽ち、彼等はリベラルはリベラルであるが、英國獨特の自由主義者であつて、彼等のリベリズムは決して抽象的な且弘く天下に通用する自由主義ではない。英國人の意味する自由主義は近代英國の社會文化を背景とする一つの歴史的範疇に外ならない。されば之が本質はミッドル・クラスの發展と之を支配したカルヴィニズム的思潮とを外にしては到底理解し得ざるものである。

英國に於て中流階級とは所謂上流社會（リッパエティ）と無産階級とを除きたる一般英國社會

を指すものであつて、その社會觀、社會傾向が悉く經濟的に統一されて居る處にその特徴がある。是れ例へば現今の獨逸中間階級ミッテレンシュタットと著しく異なる所である。即ち、獨逸の中間階級は資本勞働兩階級の板挾まりになつて居る階級であつて、その重しとする所は經濟的價值ではなく寧ろ傳統的生活樣式の維持、藝術、學問の尊重、公生活に於ける榮譽等の所謂文化價值である。随つて獨逸で此階級に屬するものは手工業者及び藝術家、教師、學者、官吏等の自由職業者である。彼等は思想や理想に於て共通點を有するが故に同一階級に屬するのではなく、近世資本主義の發達が齎した生活の壓迫によつて偶然に結ばれた階級であるといつていい。即ち、思想的には異分子の集團である。然るに、英國の中流階級は生活の習性情操、公生活に對する態度に於て異同なく平均化されたる且共通なる經濟價值判斷により結合されたる同一分子より成る階級である。されば、グレットンが英國中流階級を定義して金錢を生活の第一要件並に第一要具としたのは、以上の意味に於て略當つて居る。⁽¹⁵⁾ トーニー氏は斯かる階級及びその思想の支配する社會を「獲得の社會」と呼んで居る。パートランド・ラッセルも亦英國の社會に就て「吾邦の社會は幸福が經濟上の成功に在ると信じて切つて居るが故に金錢への愛着から蒙るその大損

失、即ち人々が斯く迄に金を欲がらなかつたら如何にその生活が豊富になり得るかを解しない⁽¹⁶⁾と論じて居る。茲にいふ「社會」とは勿論中流階級のことである。

又彼等が自分自身の産業化を當然のことと考へ、その本能的不満に無意識であることは如何に前述の中流階級の特徴が根深く英國社會に喰ひ込んで居るかを語るものである。更に又英國用語例によるブルジュアジーの譯語がミッドル・クラッスであり、町人根性がミッドル・クラッス・フィロソフィーであるが如きは何れも此の邊の消息を傳へるものと見てよからう。元來ミッドル・クラッスは身分によつて區別された階級であり、貴族と農民との間に位するものとされて居た。而して十七世紀以前の英國、即ち資本家階級が其の後の社會的實力と地位とを獲得する以前の英國に在つてはその社會上の立場は今日のミッテツルシュタントの夫と何處か似通つた處があつた。即ち、標準に於て身分と經濟的壓迫との相違はあるが、中間的地位の意識は兩者に共通であつた。例へば沙翁がポーシャの口を籍りて「It is no mean pleasure to be seated in the mean」(中位の身分を有つことは中位の仕合でなす)⁽¹⁷⁾といひデフォーが中流階級の社會的利益を説き⁽¹⁸⁾ヒュームがMiddle station in life⁽¹⁹⁾を論じたるが如き皆身分に基く中流階級の謂であつた。即ち、ミッ

ドル・クラッスは兎に角ミッドルの階級であつたのである。然るに、十七世紀以後の英國は政治的にも經濟的にも身分より「契約」に向つて進展し、曩のミッドルクラッスは事實に於て中間階級の實を失つたのみならず、その一部分は社會的實力に於て寧ろ英國の支配階級となつた。英國に於ける政治上のデモクラシー及び産業上のデモクラシーは或る意味に於てミッドル・クラッスを中心として展開した現象であつて、右の推移の過程を物語るものである。詳言すれば、十七世紀以前のミッドル・クラッスは産業革命に前後する社會的變遷の大渦卷の中に入りて二分し、一つは企業家階級となり他は勞働階級特に熟練勞働者の階級となつたのである。(田舎より都市に流込んだ熟練勞働者は別である)要するに、兩者はその出所を一つにし、隨つて性格や階級的傳統に於て多くの共通點を有つて居る。十九世紀の英國勞働運動史に於てチャーティスト運動以後英國勞働階級が資本家階級の信條たる自由主義に改宗したといはれてゐるが、私見を以てすれば、改宗したのではなく、一時中斷はされたが自由主義は上述の理由により同階級本來の宗旨であつたのである。後段に詳論するやうに、英國の自由主義は絶對的、理想的のものではなく、對國家乃至對政府的に止まるものであるが、社會的にその火蓋が十七世紀の非國教徒運動によつて切

られたといふ歴史上の關係からして英國自由主義者は大概宗教的には非國教徒であつた。さればこそ、英國産業組合運動が非國教徒の團體から生れ⁽²⁰⁾ 今日に於て猶英國勞働界の指導者が同時に素人牧師であるといふ清教徒的な珍現象が存するのである。此の事實は即ち英國經濟階級が所謂歴史的ミッドル・クラスから出て、其の間に思想の統一が存することを證するものと見て差支ないと思ふ。歴史的に見て、英國企業家階級が十七世紀に中流階級より勃興し、在來の商業資本家——主として政府關係の貴族又は大商人——と競争して遂にその跡を襲ふに至つたことは明な事實である。アンウインは十七世紀の英國産業組織を論じて「茲に一方に於て大小資本家間に他方に於て商工兩資本家の間に衝突が起つた。最初は双方の利害關係總べての點に於てその勢相半ばして居た。工業資本は主として小資本家の手にあつたのに反し、大資本家は單なる商人であつた。兩者の對峙は形勢の發展と共に新局面を開いて來た。其の結果工業資本遂に勝ち、組織立てられたる有力の團體として商業資本に對抗するに至つた。……………是等工業者の主要なる活動は企業家及び雇主としてであつた。」と云つて居る。⁽²¹⁾ 然るに産業革命はミッドル・クラス内部に於ける分野の隔たりを益大ならしめ企業家

と勞働者とを相對立せしむるに至つた。之と同時にミッドル・クラッスの上部は或は土地を購ひ或は爵位を貰ひ上流に成り濟して、過去數世紀の間に事實上英國貴族階級を乗取つて仕舞つた。此の新貴族は生活様式に於ては封建時代の貴族を眞似て居るが、洗つて見れば御里はやはり町人である。今日の英國貴族中封建時代よりの由緒正しき譜代貴族が如何程あるか又如何に彼等の多くが十七八世紀の大商工業者を祖先に有つて居るかに想到せば蓋思半に過ぐるものがあらう。又中流階級に生れたる藝術家詩人小説家等は同階級の傾向に慊焉たるものあり、之が攻撃の急先鋒となつた。是れ十九世紀英文藝界に於ける著しい現象である。かくの如く、身分としてのミッドル・クラッスは今や中流たる實質去つて、寧ろ一つの性格を表はす代名詞となつて了つた。⁽²²⁾

既にしてミッドル・クラッスが性格を表示する名稱であり、且、近世英國產業史の中心階級に關係して居る以上、產業史より觀たる國民性の研究は即ち之が思想的解剖に在らねばならぬ。以下ミッドル・クラッスの重要な屬性たる自由主義非國教主義の宗教思想を主題として聊か述べて見度い。

英國のリベラリズムは主として宗教、經濟、政治の三つの形に於て現はれた。是

等三者はその主張された時代が異なり、内容亦同じくないが、その共通な特徴が政府の干渉を排するといふ意味に於ける個人主義にあつたことは明である。然しながら、右の内政治上の自由主義はその最新の形式に於て頗る内容が異つて來た。勿論、自由黨の旗幟としての自由主義なるものは普通一般の政黨に於けると同様決して徹底した主義ではない。殊に一九〇六年以後の自由黨は所謂新自由主義の名の下に國家社會主義を標榜し幾多の社會政策を實施した。此の新自由主義は最近に至りマスターマン及びラムゼー・ミューアー兩氏によつて殆ど崇高の雄辯を以て再び世に宣言された。之によれば新自由主義は「自由のための戦争」、貧困退治の戦争「人道のための戦争」⁽²³⁾であり「國家の職分は人間の機能が自由に發達し得る條件を創造することにあるのである」⁽²⁴⁾。換言すれば自由は制限の撤廢といふが如き單に消極的のものではなく、吾人の能力を完全に發揮せしむる充分なる機會の存在を意味するものとされる⁽²⁵⁾。之れ即ち社會政策を辯護せんがための人道主義の理想であつて、英國の傳統たる自由主義の立場ではない。官僚嫌いで而して今日猶行政を一つの「必要なる弊害」と見做して居る英國人一般が考へて居る自由主義とは大にその性質を異にして居る。又議論に多少の不備があるとして

も十九世紀に於ける英國自由主義を最もよく反映するといはれて居るミルの自由論が力説する所の自由主義とは寧ろ反對の傾向を示して居る。夫故に前に掲げた政治上の自由主義が右の新自由主義の謂でないことは特記する必要がある。國家政府の干涉を排する所の以上三つの自由主義の魁は言ふ迄もなく「信仰の自由」であつた。此の自由は明白に絶對の自由ではなく、英國教會を離れて自己の信ずる所に従つて靈の救を求むるといふ意味に於てのみ自由であつた。夫故に「自己の信ずる所の教理が狹量にして不自由なるものであり得る。而して事實に於て十七世紀英國の非國教徒の大部分は清教徒にしてカルヴィンの教を奉ずる所の寧ろ排他的な基督信者であつた。又一般に如何に此頃起つた諸宗派がその信仰を形式化して眞の意味に於ける良心の自由に扉を鎖したか而して其結果非國教の父と呼ばれる人々の間に如何に意見の相違があり如何に激烈な論争が行はれたかは歴史の示す所である。⁽²⁶⁾ 抑もカルヴィニズムを基調とする信仰のその前提に於て既に限られたる自由である。即ち、カルヴィニストとしての清教徒の欲した自由は絶對的個人の自由ではなく一つのテオクラシー又はヒブリオクラシー建設に便宜なる自由であつた。彼等は自己のためより寧ろ神の榮光のた

めに活き、神の御旨が地の上に行はれんがために努力したのである。而して彼等の個人主義は此の神の御旨を體する道順にあつたのみである。その精進といひ戒律といひ或は又職業に對する出精といひ何れも之が現はれに過ぎない。かくの如く、一般に清教徒の主張は聖書の文理的解釋に基く、禮拜の自由^{に在つたので}その但し書だけの不自由が伴ふのは當然なことである。カンニングハム教授は新英國に移住した清教徒が他宗派を迫害した事實を説明して次の如く論じて居る。

「十七世紀に於ける最初の争ひは異つた教會組織を主張する人々の間に行はれた。彼等は何れも最も熱心に或種の基督教的社會組織を創造又は維持せんと努めたが、然しながら個人の自由は誰も要求しなかつた。米國に移住した清教徒は英國に於ける基督教的社會と稱する組織に反對であつたが、之が變更は到底實行不可能と見て自分達で眞に基督教の本旨に叶ふ社會を作るために英國教會から分離したのである。彼等は嚴重な教會規則を設けて、聖書に基き、聖書の原則に準據して組織された社會の純潔を保つことを自己の義務と感じた。即ち是等の人々は激烈に一つの教會組織を斥けて之に代るに他の組織を以て

したのである。彼等は決して個人の自由を主張しなかつた。若し、假りに個人に自由を與へたために自分達の新社會に於ける安寧秩序を亂すやうなことがあつては教會制に對する自己の確信に不忠となつたであらう。⁽²⁷⁾

概して新教は或種類の神秘主義及び中世末葉の素人宗教の繼續としては濃厚な宗教的個人主義の色彩を帶びて居たことは事實であるが。個人對社會の關係に就ては寧ろ保守的であつた。即ち、此の點に關しては左程に個人主義的でもないければ又社會或は團體の權力を否定するものでもない。極端なるアナバプティストの或る者を除き新教の如何なる派と雖も平等の觀念を認めたり或は個人の獨斷による社會改造の自由を説ひたりすることは絶對にない。新教の認むる唯一の平等は樂園に於ける罪なき狀態に於てのみ可能であり、罪に汚れたる現世に於て平等はあり得ない。而して、社會の不平等も權力や勢力の出現も罪深き人間の我意や利己心を押へるための神意であると考へられる。隨つて、革命的精神は寧ろ抑制される。たゞ、例外は神の尊嚴が犯されたと考へられる時であつて、カルヴィニズムが抵抗の權利、革命の權利、人民の主權、及び理性による國家社會の支配權を唱へたのは此の理由による場合だけである。けれども、カルヴィニストと雖

も是等の權利はよくよくの場合でなければ行使しないのであつて、平時は法律を尊重し、社會の秩序を守り、團體の權力に服従することを自由の條件として居る。されば、カルヴァイニズムの土壤の上に育まれた民主國は保守的である⁽²⁸⁾この保守的民主主義の特徴は國家と單獨にその内に數多の自由なる任意團體或は組合の發達を助けた點にあり、政府が之を認め間接に之を助長した結果過激的でなく寧ろ健實にして秩序ある市公民の社會を實現するに至つたことは私共の特に注意すべき點である。英國清教徒革命の最大社會的意義はそれが任意團體の一大實驗であり、非國教徒即ち主として英國經濟階級に組合の精神を鼓吹した事實に存すると私は信ずる。兎に角英國の個人主義が對國家の關係に於てその特色を有し、社會的には却て保守的であり、漸進的であり、妥協的であることには清教主義の影響は輕視することが出来ない。最も、十七世紀の英國にはバプティスト及びクエーカーの如きより徹底した個人主義的宗教團體が在つたことは事實であるが、數及び實力に於て彼等は決して清教徒の敵ではなかつた。

之によつて見れば、十七世紀英國非教徒の絶叫した「良心の自由」は必ずしも完全なる自由でなく、單に彼の場合に限り英國教會に向つて上げられた鯨波であつた。

たゞ、大切な點は非國教徒運動が英國國民、特に中流階級に與へた一大效果たる國教會及び政府よりの獨立自由である。而して、政府に頼らず、自分達で萬事を處理するといふ自立の精神は其後あらゆる方面に於て英國國民の進路を決定し、遂に近世英國史に一新紀元を劃する機運を促したものである。私見によれば、英國自由主義の本質が専ら政府の干渉を斥くるに在るといふ事實はその淵源を主として右の歴史的事情に發して居るのである。

經濟的自由主義は宗教上の自由主義に比して一層徹底して居た即ち積極的であり樂觀的であつた蓋し、經濟的自由主義は政府が個人の經濟活動に全然干渉せず之を放任して置くならば跡は人間の自利心がひとりでに社會に最も幸福な結果を生むと説くのであるが、宗教の自由は前述のやうに決して放任主義ではなく、却つて大に調節を要したのである。此の點に於て兩者の社會觀に著しき差異を見る。けれども、思想的には相互の間に密接なる關係が存するのである。有力なる學說によれば十七世紀に於ける清教徒の信仰は中流階級を刺激して十八世紀の經濟自由主義者たらしめたと稱せられて居る。⁽²⁹⁾

清教は教會組織と經濟生活とに對して全然別個な立場を採つて居た。即ち、一

には保守的であり、他には進歩的であつた。けれども、兩者の根柢に横はる敎理には矛盾はなかつた。何れも神の御心を尊重し、神の榮譽を崇高のものと考へる點に於ては即ち一である。たゞ、教會に就ては團體生活の考慮が支配して居るに反し、經濟活動に就ては個人の靈の問題のみが大事な點となつて居る。而して、其處に「豫定の敎理」の上に立つ清教徒の職業觀がある。

「豫定の敎理は神意の絶對性、神威の至上にして不可侵であるといふ思想から出發する。神の爲す所には人間の考へる善惡の標準の如きは一切行はれない。神意は絶對權威であり絶對法則である。地上總べての出來事は之れによつて發生する。随つて、人間もかゝる出來事の一つであり、彼の運命は偏に崇高の意思によりて左右される。然しながら神は決して一視同仁ではなく偏愛であり、極めて少數のものしか恵まぬ。この少數の選ばれた人間だけが救はれ、他の多くは呪はるべく豫定されて居る。即ち、召さるゝ者多くして選ばるゝ者少いのである。のみならず、神の恵は一度之を享くれば如何なる事あるも決して失ふの虞なく、享けざるものは如何に善行を積むも未來永劫に之を得る望はない。之れ人力を以て枉ぐべからざる「豫定の鐵則」である。

然らば、斯く絶望的に運命付けられた人間は如何に振舞ふべきかといふに幸にも人間は自分が神の選に入りたるや否やを知り得ないことゝなつて居る。恵まらるゝ者も呪はるゝ者も現世の生活には差異がない。故に外面的には兩者を區別し得ない。たゞ主觀的には各個人の胸に宿る信仰の厚薄が幾分の指針となる。其處で實際上の問題としては苟も基督教徒たる者は自分の救ひを確信する義務があるどされる。懷疑は即ち惡魔の惑せである。自信の不足は信仰の不充分、随つて神の恵なきの結果である。されば、何はともあれ、各人は自己の選ばれたるものなることに強き自信を有つことが肝要である。而して、かゝる自信に到達する最上の手段は自分に興へられたる職業に不斷の努力を致すことである。如何とせよ、抑も職業は即ち天職にしてベール・フ・コーリング・グ・ヴォークーションにして各人に對する神の命令であつて、之を全ふすることによりてのみ懷疑が驅逐されて、自信の念が確められるからである。かくて、この思想は遂に職業の勉勵が靈の救の外面的表示なりといふ考へを生み、清教徒の間に現世的の精進生活を宗教上の義務となすに至つた。

俗界の職業に右の如き宗教的意義を加へたるはルーテルに始まりカルヴァイン

は之を一層明瞭に且つ積極的に主張した。勞働の威嚴は既に中世に於ても充分認められて居たのであるが、當時に於ては俗界の仕事と靈の世界に於ける仕事とを確然と區別し、後者を特に價值あるものとして獎勵して居つた。然るに、新教は之に反して俗界の仕事即ち職業のみが人々に開放されたる途であると教へ、經濟生活に積極的の承認を與へた。神の禮讃は自然を超越したる特殊の精進生活に於てすべきではなく現世の日常生活に於てなさるべきであると説いたのである。かくて、新教獨特の職業觀に基く現世的精進を生ずるに至つた。今之を舊教に於ける精進生活と比較すれば(1)不自然なる精進の方法を排すること(2)瞑想の廢止(3)實業及び家庭生活に於ける戒律等の三點に於て著しき差異を見る。

既にして、職業が神意であり、活動が神の創造せる宇宙の完きを讚美する手段と考へられる以上、人々は安んじて孜々その家業に出精し得ることとなる。(30)而して之に反して無爲安逸及び放縱は此等宗教的義務に對する不忠實の行爲として、奢費又は娛樂の類は戒律生活を鈍らすものとして、極力斥られるのである。かゝる生活の直接の社會的結果は生産の増加と富の蓄積とである。富の蓄積は天職を全ふしたる當然の報酬にして併せて神に選ばれ惠まれたる者たるの外證と見做

のである。この同じ思想は又轉業を必ずしも不可としない。人若し商賣を替へることによりてより有効に利殖を行ひ得るならば、轉業は即ち神意に副ふ所以である。バックスター曰く「勞働それ自體のためでなく、勞働の目的である正當なる利殖のために働くのは罪惡ではなく、寧ろ一つの義務である。……若し神が汝に正しき儲け口を示し給ふた場合、之れを選ばず却てそれより儲け少き道をとるならば、汝は汝の職業の本旨に悖り神の執事たることを辭するものである。」と⁽³¹⁾此の考へ方によれば、各個人がその經濟活動に於て處を得て、自由にその手腕を發揮することは獨り望ましいばかりではなく、神の命令である。夫故に、かゝる理想の實現を妨ぐるあらゆる人爲的制限、就中國家の法制的干涉は罪惡である。「見へざる手」の働きの押へるのは神への挑戦である。即ち、此處に清教思想と經濟自由放任主義との間に一脈の通路を發見し得る。又自由競争の裏面に潜む適者生存の理法も清教徒の奉ずる「豫定教理」とよく符合するを見るは、あながち偶然のこととのみ看過し得ないやうに思ふ。ラッセルは資本主義と清教主義との間に存する此の思想上の並行現象を觀察して「神の代りに器械、神の榮光の代りに生産能率、選ばれたる者及び呪はれたる者の代りに貧富の別、豫定の教理の代りに遺産相續

の制度を夫々置き換へて見よ、然らばカルヴィン主義の現代的權化が産業主義であることが知れる。産業主義によれば、人は幸福ならんがために活くるに非らずして器械がより多く生産せんがためであること猶カルヴィニストが自己のためでなく、神の榮光の輝かんがために活くるが如くである。といつて居る⁽³²⁾

右英國中流階級の思想傾向を政治に於て代表するものは大體に於て政治的自由主義である。自由黨は十七世紀末葉に於て創立せられて以來、常に思想及び産業に於ける自由を以てその綱領とし、當時已に勃興しつゝありし實業階級を擁護して來た。殊に十七世紀の政治革命に際しては、ウイグ黨と大都市に於ける富裕なる非國教との關係は頗る密接なものであつた。例へば英蘭銀行の創立者は主として倫敦の有力なる非國教徒であり。彼等の國家財政に對する補助は宗教取締を緩和せざるを得ざらしめた位である。又十七世紀にはトリー黨系統の東印度會社に對抗して、新東印度會社を興したのであるが、その資本主は矢張り倫敦の非國教徒であつた。此新東印度會社は間もなく舊會社を壓倒して仕舞つたことは獨り倫敦に於てのみならず、他地方にも見得る現象であつた。⁽³³⁾

十八九兩世紀を通じて自由黨は經濟自由主義の政治的表現となり、十九世紀の

前半自由貿易運動に際しては所謂マンチエスター派として一層明瞭に商工黨たるの實を發揮した。又茲に特記すべきは自由貿易運動が非國教の各宗派よりの熱心なる後援により、著しく促進された事實である。例へば、ジョン・ブライトが穀物條令撤廢運動を率ひて起つたのは彼自身の階級的考慮のみならず、非國教徒たる彼の信仰に基く所多くあつたのである。されば、彼は一方に於て熱烈なる理想家であつたが、他方に於て工場法の如き社會政策、即ち國家干涉を排したのである。

十九世紀末頃より英國に於ける政治自由主義は已に述べたやうに著しく社會的傾向を示し、一九〇六年以後の自由黨は種々なる社會政策を實施するに至つた。この新趨勢を誘致し、英國政界の局面を轉回せしめたその思想系統の發展は今茲に論ずる餘裕を有たない。近時勞働黨の勃興と共に自由黨は中央黨として特殊の立場を占むるに至り、或は現勞働内閣との特別の關係上之に自由黨的色彩を與へ、或は又統一黨と結びて勞働黨の社會主義的傾向に當らんとする氣配さへ示すことがある。とはいへ、二百年の傳統は一朝にして破滅し去るべくもあらず、英人の個人主義は今猶強き潛勢力として彼の胸裏に存して居る。英國特殊の意味に於ける自由主義は未だ死んで居ない。

- (13) Patten: History of English Thought, pp. 27-30. (14) Schulze-Gaevernitz: England u. Deutschland. S. 88-89.
 (15) R. H. Gretton: The English Middle Class, P. 8.
 (16) Bertrand Russel: The Prospects of Industrial Civilisation. 1923. P. 173.
 (17) Merchant of Venice (18)
 (19) Hunne: Essays.
 (20) Patter: Hist. of Co-operative Movement in Great Britain.
 (21) Twinn: Industrial Organisation in the 16th & 17th Centuries, P. 109
 (22) Gretton: English Middle Class, P. 226. (23) C. F. G. Masterman: The New Liberalism 1920. P. 26.
 (24) Ramsay Muir: "The New Liberalism" quoted in the Nation and the Athenaeum. Dec. 15, 1923
 (25) Ibid.
 (26) Colligan: Eighteenth Century Non-Conformity. SI/V.
 (27) Cunningham: Christianity and Economic Science, pp. 61-62.
 (28) Troeltsch: Protestantism and Progress, pp. 150-152 (29) Max Weber, Troeltsch, Levy, etc.
 (30) Baxter: Christian Directory, "It is Action that God is most served and honored by"
 (31) Ibid. (32) Prospects of Industrial Civilisation, Chap. XIII.
 (33) Thorold Rogers: The Economic Int. of History Chap. IV. (The Soc. Effect of Rel. Movements)

四

以上述べ來つたやうに、近世英國史に於て見逃すべからざる重大な出來事であり又現代の英國民性に最も鮮やかな痕跡を刻み付けた發展は十七世紀の専ら内省的な眞劍な國民生活が其頃から英國に現はれて來た外面的諸勢力の深刻なる

作用を受けて、次第に物質主義、享樂主義に浸つて往くその徑路である。十八世紀英國に最も顯著な現象はその新なる享樂の經濟的標準である。此の時代には北米十三州の獨立、佛蘭西革命の餘波等の政治的大事件が起つたにせよ、英國社會全體としては風波立たざる至つて平穩な年月が續き、海外及び殖民地貿易の發展と共に異常なる富の蓄積と經濟生活の充實とを見た。英人が茶を嗜み、煙草を喫し、入浴を日常生活の必要とするに至つたのも、十八世紀以後のことであり、之によつてその生活程度は著しく高められた。又此の長閑な平和の光に浴して、文藝や學問は大に榮えて、ジョージ朝時代にその獨特の光輝を添へた。英文學にてはエッセイ(論文といふより寧ろ隨筆體の感想文)や劇が隆盛に赴き、倫敦ではジョンソン博士を中心にヒーム、パーク、アダムスミス等の一世を風靡した思想家文人が集まつて時事問題を論じ合つた彼の有名なるジョンソン珈琲俱樂部が英國思想界を賑はして居た。一般に人々の氣持がゆつたりとして居て、餘り物事にこだはつたり、屈託する風が見えなかつた。従つて、彼等の宗教心は頓に衰へ、前世紀を支配した清教主義の嚴肅も精進も今は跡形さへなくなつた。十八世紀は英國諸宗派の最も沈滞した時代である。英國に於て、十七世紀が宗教革命の時代であるならば、

十八世紀は産業革命の時代である。この二つの革命がよくその各の世紀に特徴づけて居る。又今一つの重要な對照は十七世紀に於ては都市が敬神思想の中心として宗教運動の淵源となつたが、十八世紀にはスクワイヤを圍繞する所謂長閑なる英國イングランドが社會の支配權を掌握するに至り、新興の商工階級は競つてカントリーゼントルマンの生活様式を眞似るに及んだことである。(今日でも英國ブルジョアの見得とする所は田舎に宏大な邸宅を構へこれに何々マナーの名稱を附して舊家ぶることである。)これは、或る意味に於て彼等に仕合せな推移であつた。何故ならば、十八世紀のスクワイヤ階級にはその比較的暢んびりした人生觀の反面に何處かに犯すべからざる健實な風、殊に氣品高き堅固なホームといふ觀念があつて英國文化に一種の澁味をつけて居つたからである。若し、十八世紀の新富豪がこの階級に倣はず、宮廷及び都市に於ける墮落せる貴族階級の風習に従つたならば、その社會的地位は斯くまでに長く保たれなかつたであらう⁽³⁴⁾。それは兎も角、十七世紀から十八世紀にかけての英國は一言にしていへば清教主義から産業主義への移り變りである而して此間にあつて兩者の橋渡しを勤めたものが英國獨特の自由主義であることは前述の如くである。

然らば、清教主義は全然その後を絶つたかといへば、必ずしも然りといへない。

十八世紀の終りから十九世紀にかけて所謂宗教復活運動なるもの起り、清教主義の雰圍氣は再び濃厚となつた。けれども、早や昔日の森嚴も感激も繰返へされなかつた。清教主義は一種のパテントとなり、その形式だけが人々の社會生活を支配するに至つた。資本主義精神への飛石となつたその職業觀の如きも曩の力

信念の力

を失つて仕舞つた。たゞ形式としての清教主義は之に反して

鐵の手を以て英人の生活と思想とを押へて居る。即ち處生訓としての清教主義及び英國國民のフイリティニズムの原因としての清教主義之である。清教主義が生活及び思想の形式化に貢獻したのはその信仰の本質から生ずる當然の結果であるが、特にこの趨勢を強めた宗派としてメソヂイズムを忘れてはならない。此の宗派は現代英國(米國も然り)の勞働階級間に最も多數の信者を有し、その社會的勢力亦從つて甚大である。その特徴はその名に現はるゝが如く秩序正しきエヴァンジェリカルなる信仰生活にある。カルヴァニズムの如く豫定の教理を前提としないが、靈の救ひが信仰の方法及び厚薄に條件付けられて居る處に神の人間に對する恩惠的約束換言すれば神の能動性と人間の受動性との對立があるといふ

點にメソダイズムが思想を形式化する特質を有つて居る。夫故に清教主義もメソダイズムも共にヘレニズムと相反する傾向を有し近世國民の哲學的藝術的發展を阻害したことは爭ふからざる事實である。因襲的前提から脱して自由に感じ、自由に考へ自由に行動すること、即ち眞の意味の自己表現が近世英國國民に缺けて居る。從來認められたる唯一の例外は經濟生活に於ける企業家の自己表現であるのみ。

近世英國產業史に主役を演ずる英國人の典型は大概右の如くである。この典型は假令その片鱗しか捕へて居ないにしても經濟學者が「經濟人」と呼んで夙にその存在を意識して居た所の典型であるが、一般思想界、殊に文藝界に於ては屢々問題となつて居るのである。早くはデフォアの商業及び商人に關する數多き論文及びそのロビンソンクルソー漂流記の如きはこの典型を題材としたものである。近くは英國町人階級の代表的作家ディッケンズ(ディヴィッド・コッパ・フィールドは典型的町人小説)、評論家マシユ・アーノールド(「カルチュア及びアナキ」及び文藝評論)、及びカーライル(特に「過去と現在」)、現代に於てはバナーード・ショウ(特に「清教徒のための劇」)及びジョン・ブルと彼の島國「ベネット」(特に小説「クレイハンガー」)、ガルスウアー・ジー(特に小説「マシ・オブ・プロバティ」)等は

何れも英國中流階級の鋭き心理描寫又は評論を試みて居る。是等を一々茲に詳論することは此の論文の範圍外であるから、今はたゞこの事實を擧ぐるに止めておく。何れにせよ、清教主義より出發して自由主義をくゞつて而かも兩者の色彩をはつきりと帶びて居るミッドルクラスこそ現代英國の優越的典型であつて産業史より觀たる英國民性を代表するものも亦即ちこれである。(了)

註 (34) Patten: Development of English Thought, chap. IV.

附記 右に論じた典型と對照をなすものはスクワイヤ典型、メヨリーイングランド典型或は又南方英國の典型例へばハアデイーの小説に描寫されて居る幻想的、神秘的なタイプであるが、これは産業史には直接關係なく、今日の英國社會全體から見ても優勢ではない。(一三、九、一二夜)